

「男、突っ走る！」

第75回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (23) 『オフィスツリーイン』代表

山岡 智行 (33) 映画プロデューサー

国枝 佐代子 (58) 市民映画プロデューサー

1 木内家・雅也の部屋（夕）

スマホで電話をしている雅也。

雅也「何があつたんですか？」

2 千葉・街の一角

スマホで電話をしている山岡。

山岡「実は、四日後に連続ドラマの撮影がありました、キャストもスタッフもそれ用にスケジュールを確保してあるんです。ただ、脚本がなくて」

3 木内家・雅也の部屋

スマホで電話をしている雅也。

雅也「え！？ 脚本がない……」

山岡の声「そうなんです。それで、ピンチヒッターとして、ぜひ木内さんに脚本を書いていただけないかと思ひまして。ギリギリで申し訳ありません。何とかお願いできないでしょうか」

雅也「……分かりました。まず、そのドラマ

の概要教えていただけますか？（とメモ書きをする）」

4 千葉・街の一角

スマホで電話をしている山岡。

山岡「ありがとうございます。千葉のローカル局で放送する深夜ドラマなんですけど、三十分枠をCM挟んで三部構成にした連ドラマです」

雅也の声「つまり、大体一話七分から十分ですな」

山岡「はい。メインキャストと端役、全部で十四人いるんですが、端役は最低一回セリフを入れていただきましたいんです」

5 木内家・雅也の部屋

スマホで電話をしている雅也——メモをしている手が止まり、

雅也「十四人もいるんですか？ 分かりました、じゃあそのキャストの方の写真や詳細

が分かるものをメールで送ってください。
一旦それで、皆さんのイメージに合わせて
登場人物作ります。あと、どの方が主役な
のか、二番手、三番手を予定してる人はど
の人なのかもなるべく教えていただけると
助かります。それをもとに、出番の調整も
してみますので」

6 千葉・街の一角

スマホで電話をしている山岡。

山岡「ありがとうございます。ちなみに、撮
影が四日後になると、飲食店などを借りて
撮影をすることは厳しいと思います。ええ、
公園とか屋外のロケなら何とかかなと思
いますが、室内ロケは基本的に厳しいと思
います。あ、公民館の会議室とかなら、何
か確保できると思います」

7 木内家・雅也の部屋

スマホで電話をしている雅也。

雅也「公民館の会議室……。分かりました、一度こっちで登場人物とプロット考えてみます」

山岡の声「プロットはざっくりで構わないので、出来次第お送りいただけますか。何となくのストーリーと登場人物が把握できれば大丈夫なので」

雅也「分かりました。では、キャストの情報お待ちしています。今日って、時間まだ大丈夫ですか？」

山岡の声「夜まで連絡はできるようにしておきますので、大丈夫です」

雅也「承知しました。では、引き続きよろしくお願いします。はい、失礼します（と電話を切る）」

× × ×

出演俳優や女優のプロフィール資料を印刷したものが机に並べられている――資料を見ながら、原稿用紙に殴り書きをするように書き始める雅也。

N 「すぐに山岡さんから、キャストのプロフ
イール資料をいただいた僕は、それを参考
に登場人物を作りあげました。いくら端役
のキャラがいるとはいえ、十四人全員にセ
リフを考える以上は、それぞれのキャラク
ターづくりをしなければならず、名前や性
格や特徴を決めるだけで、それなりの時間
を要してしまいました。その後、三話分の
構成を考えた末、山岡さんに提出するプロ
ットを作り上げました。そして、プロット
のデータをメールで送信すると……」

× × ×

スマホで電話をしている雅也。

雅也 「確認ありがとうございます。プロット
問題ありませんでしたか？」

山岡の声 「完璧です。すいません、ご無理言
って」

雅也 「いいえ。先ほどの電話で、会議室が借
りられるって仰ったでしょ。それをヒント
に、基本的にワンシチュエーションでやれ

たらと思つて。途中、屋外ロケが少し入るかもしれないですが、それ以外は全部会議室で完結できるようにします。そのほうが、撮影の移動も最低限に抑えられますし、今回の作品モノログとナレーションを多めに入れるつもりでいます。そのほうが、キャストの方、特に主演の元アイドルの方にとってはセリフを覚える負担も少なくなるでしょうし」

8 千葉・街の一角

スマホで電話をしている山岡。

山岡「そこまで考えていただいて、ありがとうございます。キャストもスタッフも、負担が減ると安心します。特に主演の方は、おそらくプロットを見る限りほとんど出ずっぱりですからね。四日後の撮影までに覚えていただくには、なるべくセリフも長くない方が……」

雅也の声「ですよね。僕もそれは思ってたん

ですよ。もし自分が同じ立場になって考えてみても、主演でずっと出ずっぱりなのに、ギリギリでセリフ覚えたくないですからね。正直、ワンシチュエーションだと絵面的にあまり変化がないような気がして、どうなのかなと思ったんですが」

山岡「いえいえ。ワンシチュエーションでも、アップや引き、カット割りで何とでもなりますよ。そこはカメラマンや監督とも相談してみます」

雅也の声「もしかして、忘年会の時に会いました方たちですか？」

山岡「ええ。なのでこちらもやりやすい環境にしたいと思ってます。スタッフたちも、脚本を木内さんが担当すると言ったら喜んでました」

雅也の声「そうですか。心強いスタッフの皆様さんなら、僕も安心です」

山岡「本当にありがとうございます。では、第一話の脚本、お待ちしております。はい、

では失礼します（と電話を切る）」

9 国枝家・リビング（夜）

夕飯の支度をしている佐代子――スマホに着信がかかってくる。

佐代子「（電話に出て）もしもし、お疲れ様です。うん、うん……あら、そりゃ大変ね。まあそれはしょうがないわよ。こっちのことは大丈夫だから。明日はね、三日目のオーディションに来てた花木さんも仕事で来れないって言ってたわ。だから明日は十一人と、はっしーと、私たち運営って顔ぶれになるわね。まあ自己紹介とかは、初回の稽古の時にすれば良いと思うわよ。ヤマさんからも、初回はキャスト同士の親睦を深めるためのレクリエーションって聞いているから。あ、あとねヤマさんから、木内君をメンバーリーダーにしたいって打診があったね、私は賛成した。やっぱり、運営とのパイプ役をやってる木内君が一番相応しい

と思うし。それと、副リーダーはね、私の市民映画にも出演してくれた麻美ちゃんにお願いしようと思ってる。あの子は経験値もあるし、みんなをまとめるのが上手いと思うから。うん、だからメンバー間のこと
はリーダーと副リーダーが中心になってま
とめてくれれば良いと思うわ。うん、じゃ
あまずは仕事のほう頑張って。はい、じゃ
あ失礼します（と電話を切る）」

10 木内家・雅也の部屋（朝）

原稿用紙に手書きで原稿を書いている
雅也——表紙に『ブラックモノローグ』
と書かれている。

N 「『スリジェネ』のリーダーになる話が正
式に決まりそうになった話を聞いて、僕は
正直不安な気持ちもありました。確かに運
営兼任となるとリーダーになるのは必然的
かもしれませんが。しかし、メンバーたちは
皆、高校の演劇部経験者や吹奏楽部、養成

所出身者、教員、バンド活動をしている者、劇団公演に出演経験がある者という強者の集まり。そんな人たちを差し置いて、僕がリーダーになることを知ったら、メンバーの人たちはどう思うだろうか。まだオーディションでしか顔を合わせていない顔ぶれでしたが、コミュニケーションもまだ取れていないだけに、落ち着かない状態が続いていました。その翌朝、僕はまず初稿として、手書きで第一話の脚本を書き始めました。多くの条件が課せられた中で、僕はOLを主人公にした会議室を舞台にした『ブランクモノローグ』というドラマを作りました。『OLが使うモノローグって何だろう』と思い立った結果、『本音と建前』というテーマが生まれ、建前としての短いセリフの後、心の中で思っている本音のセリフを多めに書きました。これは、映像だからこそできた対処方法です。『若手OLの本音と建前』という、日常でもありそうな

シチュエーションの中で、より自然な会話、自然な雰囲気を持っていけるように、何とか第一話の脚本を完成させました。国枝さんには事情を話し、『スリジェネ』の顔合わせには欠席することになったのですが、もし早く終われば途中からでも間に合うと思っていました。ですが……」

11 同場所（時間経過）

スマホで電話をしている雅也。

雅也「（電話に出て）もしもし、おはようございます。いえいえ、ありがとうございます。第一話の脚本、どうでしたか？　そうですか、それは良かったです。え……？

あ、二話と三話も一緒に撮影するんですね。すみません、僕てつきりまずは一話だけ撮影するものだと思ってました。分かりました、じゃあ二話と三話も脚本も、すぐ仕上げます。いえいえ、こちらこそ、ちゃんと確認すべきでした。はい、では遅くても今

日の夕方までには間に合わせます。はい、
また何かあったら連絡します。はい、失礼
します。(と電話を切ると)やば…：こん
なことしてる場合じゃない」

と、慌てて椅子に座ると、原稿用紙を
取り出し、プロットを見ながら原稿を
書き始める。

× × ×

原稿用紙に向かって、ひたすらペンを
動かしている雅也。

途中、何度も手を止めては頭を悩ませ
ながら、少しずつ筆を進めていく。

合間に肩を回したり、首を鳴らしたり、
腕を回したりしている。

N 「いくら自分で登場人物とプロットを作り
上げたとはいえ、三十分ドラマ一本分、原
稿用紙で言うと三十枚分を、限られた時間
の中で書き上げなければいけないというこ
とはなかなか難しいもので、何度も書い
ては消しての繰り返しの中で、脚本執筆を

進めていきました。そして、原稿用紙での
執筆を終えると、再びパソコンで清書をし、
山岡さんにメールで原稿を送りました」

12 千葉・ファミレス

パソコンでメールを確認している山岡
——雅也からのメールが届く。

山岡「来たッ……」

と、メールを開く。

雅也の声「山岡様 お疲れ様です。連ドラ第
二話の原稿お送りします。これから第三話
の執筆に入ります。引き続きよろしくお願
いいたします。木内」

山岡「ありがとうございます……」

13 木内家・雅也の部屋

手書き原稿を見ながら、パソコンに原
稿の清書をしている——タイピングの
スピードが速い。

N「何とか僕はその日の夕方までに、第三話

の原稿まで書き上げました。三話とも、まずは手書きから始めたのは、作品の世界観をイメージするために手書きにしたかったという僕のこだわりがありました。もちろん、最初からパソコンで文字を打った方が作業効率として早いことは分かっています。たが、手書きで原稿を書いて世界観をよりイメージさせるというこのスタイルは、専門学校の時に既に確立していたものでした。また、その手書き原稿を清書するためにパソコンで文字を入力しますが、このスピードもよくよく考えれば高校時代や中学時代からのパソコンスキルで培った言わば僕にとっての能力で、この時ほどタイピング速度が速いという特技を持っていて良かったと思う日はありませんでした」

14 千葉・ファミレス

スマホで電話をしている山岡。

山岡「お疲れさまでした。本当に助かりまし

た。急なお願いで失礼しました。ええ、これで無事にクランクインできます。脚本デ―タも、キャストやスタッフなど各関係者にお送りしました。いえいえ、とても初稿とは思えないぐらい面白いホンでした。では、また何かありましたらご連絡します。ええ、今日はもうゆっくり休んでください。はい、では失礼します（と電話を切る）」

15 木内家・雅也の部屋（夕）

雅也が椅子にもたれて座っている――
と、スマホに着信がかかってくる。

雅也「（電話に出て）もしもし、お疲れ様です。ええ、何とか先ほど全部の脚本書き終えて、先方にお送りしました。もし間に合えばと思ったんですけど、結局参加できずにすみませんでした」

16 中央公民館・駐車場

停めてある乗用車の運転席で電話をし

ている佐代子。

佐代子「良いのよ。無事に仕事できて何より
だったわ。うん、みんなやっぱり志が強い
子たちばかりだったからね。これから凄
く楽しみよ。グループ作って招待しておく
から、せっかくだから挨拶だけでも送って
いて。そうね、会議とかちよつとした
打ち合わせは、来週の稽古初日の時、少し
早めに集まってやりたいわね。うん、ヤマ
さんの脚本は今書き直してもらってる途中
だけど、男性陣のキャスティングはもうほ
とんど決まってるみたいよ。まあ、一回は
読み合わせをしたうえで正式に決めるみた
いだけど。じゃあ、諸々よろしくね。うん、
はい、失礼します（と電話を切る）」

17 木内家・雅也の部屋（夜）

スマホを見ている雅也——『スリジエ
ネ』のグループLINEが作られてお
り、メンバーたちがスタンプや挨拶文

を送り合っている。

雅也、トークに返信をする。

雅也の声「運営兼任の木内と言います。今日は仕事の都合で参加できずに申し訳ありませんでした。来週の稽古初日、皆さんと会えるのと楽しみにしています」

と、次々とスタンプの返信が送られてくる——微笑む雅也。

N 「経験者たちの中で、演技未経験の自分が同じ舞台に立つことは相当なプレッシャーとなっていました。それと同時に同年代の人たちと何かを一緒に成し遂げること、これは、高校時代や専門学校時代を彷彿とさせ、楽しみでもありました。とにかく、このメンバーで一つのミュージカルを作り上げるということは、失敗は許されませんでした。自分で脚本を書いているうちは考えてもいませんでしたが、やはり自分が脚本を書く側ではなく、その脚本を読み取って何かを演じる側になることは、まだイメ

ージがつきませんでした。難しそうであると思ったことは間違いありません。これまで脚本を書いてきましたが、どれも映像ばかりで、正直撮り直しができる環境です。でもよくよく考えれば、ミュージカルとなれば一度幕が上がると、最後までノンストップとなります。つまり一度の間違えも許されない、緊張感しかない現場。演技もダンスも歌も未経験の自分が、一回勝負のミュージカルというステージに立てることが本当にできるのか、ひたすら自分に言い聞かせていました」

18 同・全景（朝・三日後）

19 同・雅也の部屋

ティッシュペーパーでてるてる坊主を作っている雅也。

N 「三日後。ドラマの撮影当日となりました。去年の映画の時と同じく、僕はてるてる坊

主を吊るし、快晴の中で撮影ができることを祈っていました。去年の映画のクランクインの時は惜しくもてるてる坊主の効果もなく雨となってしまったそうですが、この日は無事快晴の中、ドラマ撮影が行われました」

× × ×

てるてる坊主が吊るされている。

雅也がパソコンで事務作業をしている。

N 「その日のうちに、山岡プロデューサーからクランクアップまで迎えた報告を受けました。ピンチヒッターという形で思いがけない形で依頼を受けた脚本の仕事でしたが、これが僕にとっての、地上波ドラマ脚本初仕事となったのでした。バタバタの中での執筆でしたが、無事に全て終わったことに安堵していました」

× × ×

パソコンの画面を見ている雅也。

N 「出演者の方のブログを読むと、『はじめ

台本読んだ時、面白い！！と思いましたが、今日演じていてもとっても楽しかったです。本音と建前！なかんじ。あるある！」と書かれていて、この仕事をやって良かったと思いました。千葉のローカル局なので、こちらでは放送されないことが残念でしたが、告知だけは抜かりなく行いました。そして、世間では間もなくゴールデンウィークに入し、僕も少しながらの連休を過ごそうとしていました。そして、ゴールデンウィーク最終日の五月六日には、『スリジエネ』の初稽古が始まるのでした」

つづく